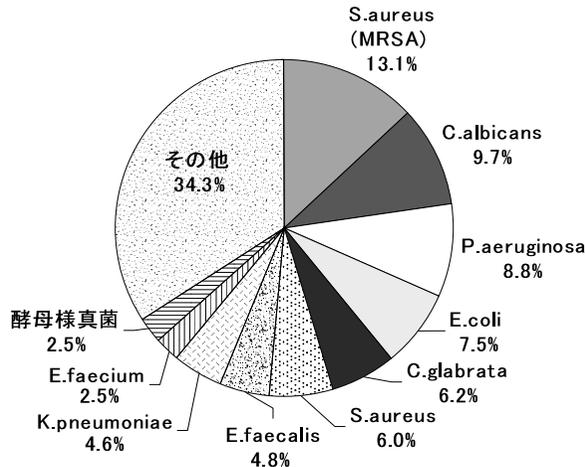


くすり一口メモ

— 鹿児島市医師会病院における細菌分離状況と
緑膿菌に対する抗菌薬の感受性について —

日本感染症学会と日本化学療法学会が共同で作成した「抗菌薬使用のガイドライン」には、「抗菌薬を適正に使用するためには、感染病巣をできるだけ早期に診断し、原因菌を的確に捉え、原因菌に抗菌力を示す薬剤の中から、安全性の最も高い薬剤を選択することである」と記載されています。実際に院内で検出される病原菌は各施設で異なっており、病原菌に対する耐性化率や感受性率には違いがあります。そこで、当院での平成19年度の全材料における細菌分離状況と感受生率を集計してみました。



グラフは当院から鹿児島市医師会臨床検査センターに依頼した微生物検査、2,872検体から分離された細菌の検出割合を表しています。最も多く検出された細菌がMRSAで、次にカンジダ・アルビカンス、緑膿菌、大腸菌、カンジダ・グラブラータと続いています。上位10菌種の中には2種類のカンジダ属が入っており、両方を合わせると全体の15.9%を占めています。

MRSAは377検体から分離されており、喀痰からのものが48.5%と最も多い状況となっています。次に膿汁7.7%、IVHカテーテル6.4%、ドレーンと動脈血がそれぞれ4%となっています。大腸菌は216検体から分離されており、胆汁19.9%、カテーテル尿19.4%、中間尿17.1%、喀痰11.1%、膿汁7.4%の順に多く検出されています。また、緑膿菌は252検体から分離されており、喀痰45.2%、カテーテル尿7.5%、胆汁5.2%、ドレーン5.2%の順に多く検出されています。

次に、検出率第3位の緑膿菌に対する抗菌薬の感受性・耐性率をグラフにしてみました。緑膿菌に対しては、ゲンタシン (100%)、ピクリン (97.3%)、トブラシン (94.2%) とアミノグリコシド系の感受性率が最も高い割合となっています。次にβラクタマーゼ阻害薬であるタゾシン (91.9%)、スルペラゾン (90.7%)、4世代セフェム系のファーストシン (89.8%)、

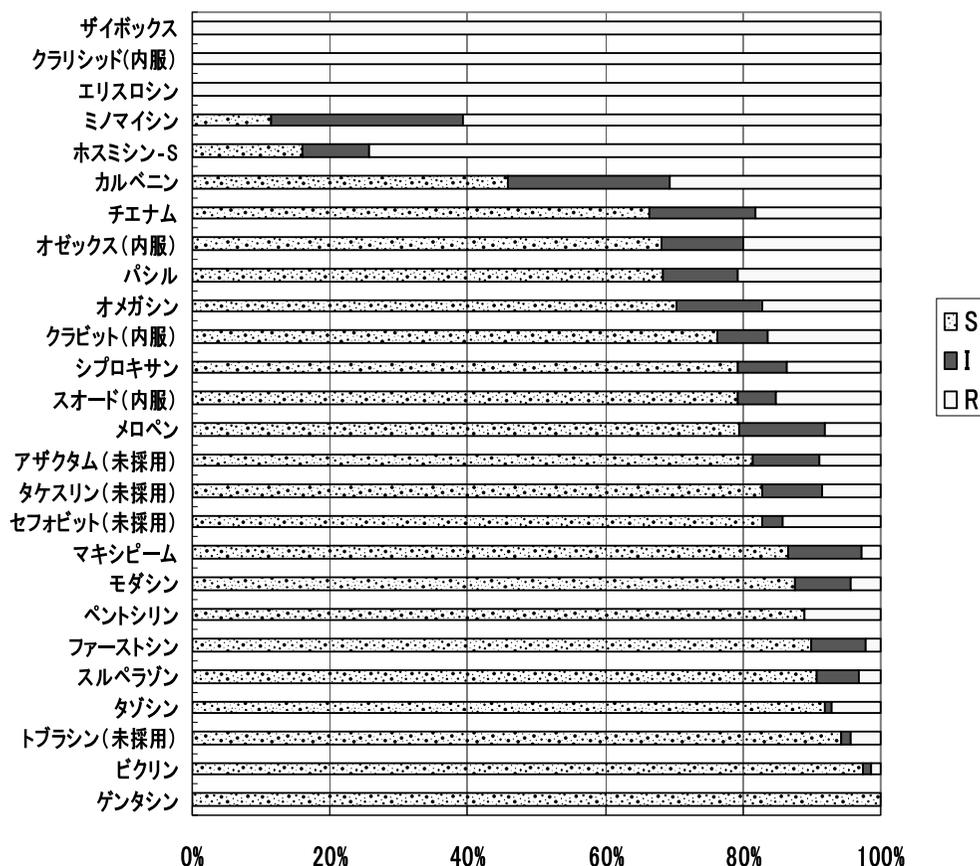
マキシピーム (86.5%)、そして、緑膿菌用ペニシリンのペントシリン (88.9%) 及びセフェム系のモダシン (87.6%) の感受性率が高くなっています。一方、緑膿菌に効果が高いといわれるカルバペナム系では、メロペンが79.5%、オメガシンが70.3%、チエナムが66.4%、カルベニンが45.9%とすべて80%を割った感受性率になっています。

耐性率の高い薬剤は、ホスミシンS (74.3%)、ミノマイシン (60.6%)、カルベニン (30.6%)、パシル (20.7%)、チエナム (18.1%)、オメガシン (17.1%) の順となっています。

呼吸器系材料と全材料からそれぞれ分離された緑膿菌に対する抗菌薬感受性率の違いについて比較してみました。両方の材料から分離された緑膿菌に対して多くの抗菌薬が同等の数値を示していますが、パシルについては全材料から分離された緑膿菌に対する感受性率が68.5%、耐性率が20.7%となっているのに対して、呼吸器系材料から分離された緑膿菌では感受性率が84.6%、耐性率が9.2%と異なった割合を示していました。

原因菌が緑膿菌であると確定した場合の抗菌薬選択の参考になれば幸いです。

P. aeruginosaの感受性・耐性率



参考資料 鹿児島市医師会臨床検査センター分離菌・感受性報告書
 「抗菌薬使用のガイドライン」日本感染症学会，日本化学療法学会
 (鹿児島市医師会病院薬剤部 寺師 守彦)